2015年7月5日 第一主日聖餐礼拝

説教「ほっとしませんか？」

マタイの福音書11章28-30節

【かろやかに生きる】

主イエスが「わたしがあなたがたを休ませてあげます。」(28) とおしゃっているのは、私たちの抱えている苦労や問題が全部なくなるということではありません。よく読めば、主イエスは、「重荷を降ろしてあげよう」とはおっしゃっていません。「重荷を私が代わりに負ってあげよう」ともおっしゃっていない。主イエスがおっしゃっているのは、私たちが、自分の責任や使命を果たしていくのを、主イエスが支えてくださるということ。ある牧師が、この箇所から「かろやかに生きる」という題で説教をしたそうです。なるほどと思います。私たちが毎日をどう生きるか。毎日に押しつぶされそうになって、下を向いてしまうのか。それとも、荷を負いながらも心かろやかに生きて行くのか。そこに主イエスが踏み込んでおられるのです。

【重荷を重荷としているのは何であるのか】

私たちの重荷を重くしているのは、自分は愛されていないという思い。こうした思いが私たちを疲れさせます。虚しくて、もう投げ出してしまいたくなるのです。愛されていないと思うときに、私たちの心はうつむいてしまう。すると、負っている荷が肩に食い込んでくるのです。

今日の主イエスのみ言葉は、主を受け入れなかった町々とその宗教的な指導者に対する歎きに続いて語られているところです。当時の宗教的な指導者であったパリサイ人たちは、律法の教師だと自らをもって任じていましたが、律法の一番たいせつな核の部分を忘れていました。それは神さまの愛でした。

彼らは、実に重い重荷を負っている人たちでした。自分たちが神さまから愛されていることを忘れ、神さまを勝手に誤解して、律法違反に対してただただ厳しいだけのお方だと思い込み、主の弟子たちを責め、主を責めていたのです。彼らの心には休みはありませんでした。うなだれた心で、重荷に苦しんでいたのでした。

【わたしが休ませてあげます】

「すべて、疲れた人、重荷を負っている人は、わたしのところに来なさい。わたしがあなたがたを休ませてあげます」(28) という主イエスの招き。これは、パリサイ人たちにも、私たちにも、すべての人に対するものです。

この28節から30節までのわずか3節に6回も「わたし」という言葉が用いられています。主は、「あなたがたを休ませることができるのは、わたしだ。わたしが自分であなたがたを休ませてあげよう」。そうおっしゃってくださいました。私たちを愛して、ご自分から進んで、ご自分の犠牲において私たちを休ませてくださる、そうおっしゃってくださったのです。

【何度でも何度でも何度でも】

主イエスの招きに応えて、たましいの安らぎを与えられた私たちですが、たびたびうつむいてしまいます。言葉においても、思いにおいても、行いにおいても、愛することが足りないことを思い知らされるからです。

けれども、主イエスは「わたしが休ませてあげます」とおっしゃっています。何度でも何度でも、休ませてくださるのです。「あなたがたの足りなさも、みな十字架の上で、わたしが引き受けている。わたしはあなたがたを、わたしはどこまでも赦して受け入れている。だから生きよ。かろやかな心で生きよ」。そうおっしゃってくださるのです。

主イエスのそんなお言葉を聞くとき、私たちの負っている荷が軽くなります。主イエスが私たちの重荷から重さを吸い取ってくださる。ご自分のうちに吸い取ってくださるのです。だから私たちは、もう自分を責める必要がないのです。今日は今日の重荷を負えば良いのだということがわかるのです。

親として、子として、家族の一員として、地域や職場の一員として、そして教会の一員として、私たちの負っている責任と使命はなお続いていきます。けれども主イエスの愛を知り、その愛にとどまるときに、私たちのたましいには平安があります。重荷を負いやすく負い、足どりも軽く生きることができるのです。